

COVID-19流行下での医療を安全・安心に提供するために～病院職場での活動報告～

本発表における利益相反開示

本発表に関連する開示すべき利益相反に該当する項目はございません。

診療科：24科 病床数：651床 職員数：1,510人
(R3.4.1現在)

当院の概要



を柱として、成長し続けられる病院を作ります

高品質な医療

- Advanced** 先進的な医療設備、技術の導入
- Expandable** 将来の医療技術の進歩、医療需要の変化に柔軟に対応できる設計
- Tough** 災害に強い構造と設備、ネットワーク

医療人の育成

- Education** 教育研修設備の充実
- Love** 愛情を持った教育
- Environment** 働きやすい職場環境

環境への配慮

- Comfortable** 快適さとプライバシーが守られる環境
- Eco-friendly** 周囲環境との調和
- Saving** CO2削減など地球環境への配慮



OBIHIRO
KOSEI
HOSPITAL

本日の内容

1. 目的 最前線で勤務する医療スタッフの支援活動について報告
2. 方法および結果 活動内容と各活動の現状や成果の紹介
3. 考察 医療機関の産業保健専門職として活動を振り返って
4. 結語 医療機関の産業保健専門職の役割とは

1. 目的

新型コロナウイルス感染症の国内外の蔓延に伴い、指定医療機関として2020年3月より罹患患者の診療を行なってきた。

最前線で就業する医療スタッフの支援活動を報告することで、医療機関の産業保健専門職としての役割を改めて考えていくための資料とする。



2. 方法および結果

実施した内容

- 1) 情報発信
- 2) 院内巡視
- 3) 感染症対応病棟従事者へのヒアリング
- 4) 「疲労蓄積度自己診断チェックリスト」と「アテネ不眠尺度」全職員調査
- 5) 心理サポートチームの立ち上げへの提言

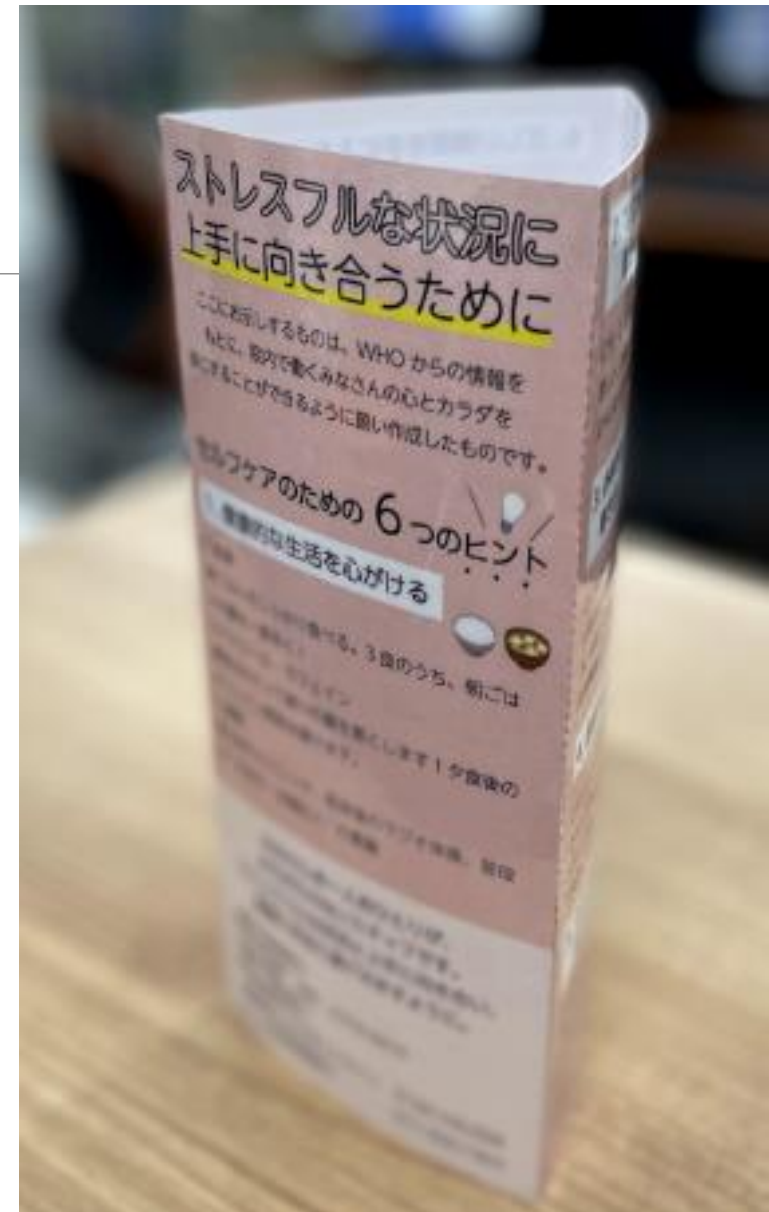


1) 情報発信 セルフケアに関すること

ストレスフルな状況に上手に向き合うために
セルフケアのための6つのヒント

- 1、健康的な生活を心がける
- 2、自分の気持ちに気づきましょう
- 3、ストレス対処法を書き出し使いましょう
- 4、信頼できる人と話をしましょう
- 5、いつもと違う自分に気づいたときは
- 6、正しい情報を手に入れましょう

☆簡単にできるリラクゼーション法も紹介
－WHOからの情報をもとに作成－



1) 情報発信 セルフケアに関すること

「いまここケア」※の紹介
セルフケア研修会でも取り上げ、
セルフケアの実施状況を追跡調査
セルフケア研修会参加者の37%が1
か月後も継続して「いまここケ
ア」を活用したセルフケアを実践
していた！



※東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野運営サイト

実践項目	回答者	回答者の内実践した割合	
		1か月後調査	3か月後調査
”いまここケア”のサイトを見た。	32	35.5%	29.0%
マインドフルネス呼吸	32	45.2%	35.5%
行動活性化「3密を避けた安全な活動」	32	53.2%	48.4%
身体活動に何か取り組んだ。	32	35.5%	32.3%
睡眠の”リラックスに導くコツ”	32	33.9%	25.8%
睡眠の”眠りにくい生活習慣を見直す”	32	38.7%	27.4%
テキストに載っている入眠儀式	32	30.6%	27.4%
自分の入眠儀式をつくった。	32	30.6%	22.6%
睡眠の”緊張をほぐす深呼吸”	32	37.1%	27.4%

1) 情報発信 職員へ伝えたいこと

職員の皆様へ

新型コロナウイルスに関する人権被害を防ぐ

帯広厚生病院

3つの宣言

1 感染者を守ろう

感染者は非難される対象ではなく、守られるべき存在です。
感染者が安心して治療に励めるよう、職員全員でサポートしましょう。

2 感染者の家族、所属部署を守ろう

感染者だけでなく、感染者の家族や感染者が所属している部署も守られるべき存在です。
誹謗中傷・差別的な言動は避け、温かく見守りましょう。

3 風評被害を防ごう

感染していないにも関わらず『感染者だ』などの噂を流され、本人・家族・所属部署が差別され苦しむという事例があります。不必要な情報の詮索や、誤った情報・不確かな情報の拡散は避け、公的機関が発信する正しい情報に基づいた、冷静な行動に努めましょう。

2) 院内巡視 感染症対応病棟

3 管理の視点で巡視 (一部抜粋)

作業管理	作業環境管理	健康管理
PPE着脱の正確性	避難経路の確認	休憩時間・場所
サイズの適切性	陰圧室の環境	体調変化の有無
一入室のケア時間	整理整頓	セルフケアの状況
ケア内容と人員充足状況	必要物品の充足状況	妊婦への配慮

3) 感染症対応病棟ヒアリング 2020年3月初旬、6月下旬

	2020.3月	2020.6月
スタッフ	「短期間でPPE着用の教育や人工呼吸器の取り扱い等々指導を受けました。」	「3月に比べ、環境や作業手順に慣れてきました。」
	必要物品は不足することはありませんでした。	「いつまで続くのかという見通しな無さがきついです。」
	突然の異動に適応することは大変でした。	「患者不在時、他病棟への応援業務がきついです。」
上級職者	「とにかく疲れました。」	「異動者の体調が心配です。」
	「色々な部署が協力してくれて助けられました。」	「妊婦からの相談への対応はどうすれば？」
	情報が錯そうしている場面があり戸惑いました。」	「シフトを組むのが大変です。」

4)「疲労蓄積度自己診断チェックリスト」と「アテネ不眠尺度」調査調査結果(一部抜粋)

	1回目 (2020.6月) n=740				2回目 (2020.12月) n=688				
	不眠なし群		不眠あり群		不眠なし群		不眠あり群		p値
仕事の負担度	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	
0~1 低い	306	67.5	75	26.1	282	64.7	65	25.8	
2~3 やや高い	81	17.9	82	28.6	103	23.6	66	26.2	
4~5 高い	44	9.7	61	21.3	41	9.4	57	22.6	
6~7 非常に高い	22	4.9	69	24.0	10	2.3	64	25.4	

「仕事の負担度」が高いほど、「不眠あり群」が有意に多かった。6月の結果から、セルフケアへのサポートを重視した取り組みを強化。心理サポートチーム結成への気運を高めた。

5) 心理サポートチーム立ち上げへの提言

目的：①COVID-19がもたらす、メンタルヘルスへの影響の理解を促し、個人が置かれた状況への適応力や回復力を高め、皆がその状況に自分で対処していけるように支援すること
②危機的状況となった対象を早期に発見し、迅速に介入できる体制を構築・運用すること。

メンバー：精神科医師 臨床心理士 医療メディエーター
産業医 産業保健師

活動内容：前述の1)～4)を心理面については本チームがサポート



5) 心理サポートチーム立ち上げへの提言

実際の活動

「サポートカード」作成 いつでもどこからでもアクセス可能

COVID-19 心理サポートチーム

精神科	厚生 太郎	医師
産業医	厚生 太郎	医師
臨床心理士	医療社会事業科	厚生 太郎
医療メディエーター	総務課	厚生 太郎課長
	医療安全管理科	厚生 太郎科長
	医療安全管理科	厚生 太郎係長
産業保健師	総務課	太 田

※院外からのご連絡は代表電話
におかけいただき、上記内線番号をお伝えください

COVID-19 心理サポートチームはセルフケアからイベント発生時、そして職場復帰までを包括的にサポートします。

ナレーション動画はこちらの
QRコードを読み取っていただくか、
URL よりアクセスしてください。



QR

院外から直通電話
メールアドレス

3、考察

1) 情報提供

様々に状況変化が目まぐるしい中でも、産業保健側から提供されるセルフケアに関する情報は、どの時にも応用可能であり、平時からのセルフケア教育が重要であることが再確認された。

2) 職場巡視

感染症対応により環境が大きく変化し、変化に対応しようと試行錯誤する姿を目の当たりにした。3管理の視点で巡視することにより、試行錯誤の方法が感染対策に有効か、健康管理の視点でも問題が無いかを複数の視点で確認ができた。



3、考察

3) 感染症対応病棟従事者へのヒアリング

平時から面識のあるスタッフが多数を占める中、「誰に相談したらいいかわからなかった。」と駆け寄ってくるスタッフがいたり、上級職であるからゆえ、思いを吐露する場がなく当方に思いを話してくれる方がいたり、**“スタッフの一番そばにいる”** 存在として役割を果たせたか

4) 全職員への調査

回答率が45～48%と低かったために全体の状況把握はできなかった。しかし、「仕事の負担度」と「不眠あり」に有意差があったことは今後長期的なサポートを実施していくうえで有用な情報である。



4、結語

医療機関における産業保健専門職の役割

- ①適切なタイミングで、正確な・有用と思われる情報を、必要としている対象に迅速に届ける。
- ②変化し続ける環境に、ハード面もソフト面も両方の視点から巡視を行い、支援が必要な状況がないか常にアンテナを張る。
- ③適時調査を実施し、現状把握につとめ、対策に結びつける。
- ④専門職集団という特徴から、自らの不調や困り感を表出しにくい組織風土になりがちであるため、“一番近くでスタッフの声に耳を傾ける、共に在る”存在でいること。

ご清聴ありがとうございました



OBIHIRO
KOSEI
HOSPITAL